



## 来て来て先輩 宮津航一さん 後編

昨日の続きとなります。6時間目は、宮津航一さんからの話がありました。6年生は音楽室で直接話を聞き、4・5年生は教室でZoomを使って話を聞きました。講話の概要は以下の通りです。

僕は3歳の頃に、こうのとりのゆりかごに預けられました。皆さんは、小学校の勉強で、自分の生い立ちを振り返るという授業をしたことがありますか？僕も2年生のときにやったのですが、赤ちゃんの頃の写真が無かったため、兄の写真を借りて作り、名前の由来も、父親が考えてくれました。また、誕生日が分からず、当時の身長・体重から、専門家の人たちがこの子の生まれは11月3日じゃないかと予測してくれたのです。その後、本当の誕生日が11月5日ということがわかりました。当時の僕は、友達に「11月5日に誕生日変わったの？」と気づかれないようにと生活していました。その後、僕のお母さんが交通事故で亡くなったことがわかりました。それを聞いて、悲しいと言うより、わかってよかったという喜びの方が大きかったです。その年の夏、実の母親の墓参りをしたときのことです。お父さんが、「航一くんは、一生懸命育てますけん、お母さんは心配せんでよかですよ。」と言ってくれたことが、僕のことを本当に大切に育ててくれていると感じた瞬間でした。家族にはいろんな形があります。それはどれも間違いではないのです。僕が思う家族について話をします。僕が4年生の頃、友達と3人(僕・体格のいい子・足が不自由な子)で下校しているときに、体格のいい子が、足の不自由な子にランドセルを持たせたことがありました。僕はモヤッとして、そのことをお父さんに相談しました。するとお父さんから「闘ってみろ!」と言われ、僕なりの闘い方を考えました。また同じことがあって、僕は「お前がそういうことするなら一緒に帰らん。」と言いました。その後、相手側の保護者からお母さんに「いじめられた」という苦情の電話がありました。いろいろやり取りがあった後、相手の保護者から「航一くんは、親がおらんけん、そういうことをするんでしょ?」と言われ、普段は穏やかで優しいお母さんが、泣きながら「うちの子はそんな子ではありません。」と電話を切ったんです。そのとき僕のために闘ってくれたことを嬉しく思いました。やはり家族というのは、最後まで味方である存在ということをお父さんとお母さんの姿から教えてもらいました。さっき6年1組で道徳で「おかげさまで」の勉強をしましたが、僕もいろいろな感謝をもらって生きてきました。地域のために恩返ししたくて自分ができるところをしようと思って、取り組んだ中の一つに「子ども食堂」があります。また、子ども大学も、感謝とか頂いたものを返していきたいと思ってやっています。子ども食堂や子ども大学は、自分がやっているというよりやらせてもらっているという気持ちです。僕を支えてもらっている存在があっってはじめてできることです。そういう存在は、本当に大事にしなければなりません。最後に学べる学びと学べない学びについてです。学べる学びというのは、教科書を先生から教えてもらおうと学べます。しかし、教科書に載っていない学びもとても大切だと思います。例えば、道路に落ちているゴミを拾って清掃活動をするとか、お家の人とどこかに行くとか、教科書で学べないことを皆さんには大切にしたいと思っています。そのためには、学校や家から一歩外に出て、自分が何かできないかと考えて行動することが大切です。それをすることが誰かの「おかげさま」になるのです。これから生きていく若い皆さんが、アンテナを張っておくことがきっかけとなって、それを誰かがつなげてくれるし、意識がそこに向きます。最後に僕の好きな言葉を紹介します。「置かれた場所で咲きなさい」これから、皆さんが自分の置かれている場所で自分なりの花を伸び伸びと咲かせるように頑張ってくださいと思います。

お話を聞いた後の感想交流で、「帯西レドの心が伸びました。このように様々な活動をしている人がいて、僕も宮津航一さんのように頑張っていきたいと思ったからです。」などの感想が聞かれました。子供たちにとっても、生き方を考える機会となったと思います。宮津航一さん、ありがとうございました。

